

私、さらわれちゃいましたっ!

Suzu & Kei

苑水真茅

Machi Sonomi

termity



エタニティ文庫

目次

私、さらわれちゃいましたっ！

5

書き下ろし番外編

私のはじめてのひみつ

349

私、
さらわれちゃいましたっ！

第一章 ニートさんに買われました

定食屋『うめたに』の開店は、十一時。紺に白抜きのれんの暖簾を出して、それを知らせるのは私の仕事だ。

「ああ、今日もいい天気」

いつものように、暖簾を抱えて店の外に出た私は、空を眩まぶしく見上げた。

「暑い一日になりそうだなあ」

じりじりと肌を焼く日差しが降り注ぎ、蟬せみの歓喜の音が木霊こなまする。大きな入道雲がむくむくと広がって、その向こうには一筋の飛行機雲が見えた。お盆も過ぎたけれど、まだまだ夏真まつ盛りだ。

「寿々すずちゃん、おはよ！ 今日の日替わり定食はなんだい？」

入り口に暖簾をかけていると、後ろから声をかけられたので振り返る。そこには、お店の常連である武中たけなみさんがいた。タクシー運転手の彼はいつも開店と同時にやって来て、早めの昼食をとる。

「おはよう、武中さん！ 今日、酢豚すぶただよ。夏野菜がいっぱい入ってて、これを食べれば夏バテ知らず。キユウリの冷や汁ひよ汁に、茄子なすの揚げ浸ひたしもあるよ」

「おお、いいねえ。じゃあ、日替わり定食、ご飯大盛りで頼むよ」

体は大きいし強面こわもてだけど、性格はともおっとりしていて優しい。武中さんほにこにこと笑いながら、暖簾かまどを潜くぐった。

私も、その後が続いて店の中に入る。そして厨房ちゅうぼうに向かって「日替わり一つ、ご飯大盛りで！」と大きな声で言うのだった。

駅から少し離れたところにある『ひなぎく商店街』。昔ながらの雰囲気を残したそこは、いかにも下町といった、どこか懐かしい空間だ。その商店街の一番隅にあるのが、定食屋『うめたに』。私、梅谷うめや寿々すずを育ててくれた伯父夫婦が経営している店だ。

店内は、カウンター席が五つ、四人掛けのテーブル席が五つと、小ぢんまりとした造り。

おすすめメニューは、ふわふわとろとろの玉子がのった親子丼。ぷりぷりしたお肉と、井つゆいづゆがしみ込んだご飯が堪たまらない。過去にはテレビの取材を受けたこともある、自慢の品だ。

その日のおすすめ食材を使った日替わり定食も美味しいし、定番メニューの豚しょうがの生姜焼き定食も根強い人気がある。夜だけ提供される一品料理も、みんなお酒にぴったりで、

とても喜ばれている。商店街でも結構な人気店として知られ、昼時になるとよく行列ができる。

私は、高校生の頃からこの店を手伝っており、短大卒業後には従業員として働くようになった。少しでも、恩ある伯父夫婦の助けをしたかったからだ。

私は、十歳の時に両親を車の事故で亡くしている。私はその車に同乗してはいなかったけれど、突然家族を喪うこととなった。一人残された私を引き取ったのが、父方の伯父夫婦。子どものいない彼らは、私を可愛がって育ててくれた。

夫婦で切り盛りしている小さな定食屋だから、裕福とは言えない。それでも、私には不満なんて何一つなかった。

誕生日は一緒にお祝いして、休日には近場だけれど遊びに連れていってくれた。伯母は仕事を抜け出して授業参観に来てくれたし、伯父はどこのお家よりも豪華なお弁当を作って運動会に来てくれた。両親を喪った寂しさに長く囚われずに済んだのは、彼らの優しさのおかげ。

短大卒業後の進路について話が出た時、私は迷わず『うめたに』で働くと言った。伯母は体があまり丈夫でなくて、体調を崩すことも多い。しかし、夫婦で営む小さな店では休むこともままならず、いつも無理を押しつけて店に出ていた。私はそんな伯母の助けになりたかったのだ。

そして、働き始めて二年が過ぎた。

伯父夫婦と一緒に『うめたに』で働けるのは、とても幸せだ。

狭いけれどきちんと掃除された店内は、居心地がいい。お客さんたちはみんな優しく、にこにこしていて、美味しそうに定食を食べてくれる。そんな姿を見ていると嬉しくなる。

「寿々ちゃん、今日も来たよー。とんかつ定食ね！」

「お、今日の日替わりは酢豚か。じゃあ俺は日替わりもらおうか」

「はい！ かしこまりました！ こちらお待ちせしました、生姜焼き定食です！」
注文を取って、料理を運んで。店内をくると動き回るのはすごく楽しい。我ながらなかなかの働きぶりだし、こういうのが天職っていうのかなあと思う。時間が経つのも、あつという間だ。

少し客足が落ち着いたなと思って壁掛け時計を見上げたら、午後二時に差し掛かろうとしていた。

うわあ、もうこんな時間。その時、店の引き戸が開いて、お客さんが一人飛び込んできた。

「うう、雨が降ってきたぜ。濡れちゃった」

「え、雨？」

朝はあんなにいいお天気だったのに？ 驚いて戸を開けてみれば、いつの間にか空はどんよりとして、地面には大粒の雨が叩きつけられていた。

「午前中はあんなに晴れてたのにねえ。このタオル、よかつたら体を拭くのに使つて下さいな」

伯母がお客さんにタオルを渡しながら言う。

「夕立にはまだちよいと早いなあ。いらつしやい。最近、天気が落ち着きませんねえ」少し手が空いたらしく、厨房から顔を覗かせた伯父も言う。

「寿々、タオルを少し出し出しておくれ。他にも濡れてこられるお客さんがいるかもしれない。ああ、あと帰りに貸してあげられる傘も」

「うん、分かった」

店の裏手は自宅になっており、厨房からドア一枚で行き来できるようになっている。

私は自宅に行き、数枚のタオルと、何本かの傘を持ってお店に戻る。すると伯母が「タオル、あちらに渡してあげて」と言った。

「はい。あ」

入口を見た途端、私の視線が止まる。

そこには、男の人が立っていた。『うめたに』の常連さんの一人だ。

年は三十手前くらい。セットとは無縁の、ぼさぼさの髪がトレードマーク。格好は着

古したTシャツに、ダメージジーンズ。それに、背中のメッセンジャーバッグと、履き込まれたスニーカーが加わる。だけど、それらを纏う体躯はモデルさんのようで、背はすらりとして高く、手足も長くてバランスがいい。

わあ、今日も来てくれたんだ。思わず心が跳ねる。ほっぺたがむずむずして、口角が自然と上がってしまった。

「いらつしやいませ。あの、タオルどうぞ」

声をかけると、彼は私の方を向いた。顔の作りが分からないほど長く伸びた前髪からは、雫がぼたぼた滴り落ちている。

「わあ、びしょ濡れじゃないですか！」

「急に降り出すもんだから、びっくりした。天気予報、雨なんて言つてなかつただけだな」

ありがとう、と言つて彼はタオルを取り、髪や顔を拭う。そうして「日替わり一つ」と続けた。

「はい、日替わりですね。日替わり一つー！」

厨房に声をかけ、それから彼の方に視線を戻す。

「カウンターでいいですか？ あそこが空いていますので」

ああ、と頷く彼に、お冷を持つてこようと、踵を返す。

その途端、つるりと足が滑った。ぐるんと視界が回り、ああ、転んじゃう、と思ったその時。

ひよい、と体を支えられる。

「大丈夫？」

ポカンとしている私の顔を覗き込んだのは、まだ前髪を湿らせた彼だった。

茶色い前髪の奥にある榛色の瞳が、真っ直ぐに私を見つめている。

近い。こんなに距離が近いのは、初めてだ。それに、私の腰には今、彼の逞しい腕が回っていて……。鼓動がドキドキと速まり、息苦しさを覚える。ほっぺたが熱いから、きつと真っ赤になっているに違いない。

お、お礼を言わなきゃ。でも、喉の奥が麻痺したみたいに動かない。

「ありがと……ござ、ます」

どうにか言葉をつき出すと、彼はふう、とため息をついた。

「そこ、床が濡れてる。気を付けた方がいいよ」

「は、はい」

私を立たせた彼はタオルを首にかけ、カウンター席に座った。それから何事もなかったかのように、背負っていたメッセンジャーバッグから漫画を取り出して、読み始める。「寿々ちゃん、大丈夫だった？ ごめんさい、さっきそこにお冷を零して、拭くところ

らだったの」

雑巾を手にした伯母が申し訳なきように言う。

「大丈夫だよ、伯母さん。ニートさんが助けてくれたから」

小声で言うのと、伯母はほっとしたように笑った。

私は、まだドキドキしている胸元にそっと手を当てて、彼の方を窺い見る。

少し、近づいちゃった。ああ、もっと、お話できたらいいのになあ。お名前とか、知りたいのになあ。

だっていつまでも『ニートさん』って呼ぶのは、さすがに申し訳ないって思うんだもの。

——そう、私は名前を知らない彼のことを、密かに『ニートさん』と呼んでいるのだった。

彼はもう何年も前から『うめたに』に通ってくれている。注文するのは、決まって日替わり定食。好き嫌いがいいのか、いつもきれいに残さず食べる。

注文してから料理が出るまでと、食事の後の少しの間、彼はいつもメッセンジャーバッグの中に入れてある漫画を読む。そして、それを読み終えたところでふらりと帰っていく。昼食時と夕飯時、一日に二回来る、なんてこともある。

『学生でもなさそうだし、一体何の仕事をしている人なんだらうね』

『平日の昼間に、あんな格好でふらついているんだ。テレビでよく聞くニートってやつじゃないか?』

『今は就職難らしいものねえ。でも収入がないのに、こんな頻繁ひんぱんに外食して大丈夫なのかしら』

伯父たちが彼のことをこっそり『ニートさん』と呼んでいるうちに、そのあだ名は私の中ですっかり定着してしまった。ニートさんはそんなことはつゆ知らず、毎日のようにやってきては日替わり定食を食べ、漫画を読んで帰っていく。

私は、このニートさんが随分前から気になっていた。

彼は、あまりしゃべらない。店に入ってくる時に「ドーも」と言い、「日替わり」と注文して、帰る時に「ごちそうさま」と言う——それくらいだ。

だけどたまに、話しかけてくれる。私が普段と違う時に限って。

『今日は元気がないね。どうしたの?』

『喉のど、少しおかしいね。マスクして、こまめにうがいしたほうがいい』

『いいことあった? ニコニコしてる』

他のお客さんどころか、伯父たちでさえ気付かないわずかな変化。彼はどういうわけかそれを察知して、声をかけてくるのだ。そうして、私が事情を話したら、長い前髪の下でそっと笑ってくれる。

『それは君の気にしすぎ。相手はそんなこと、もう忘れてる。だけど、反省してるんならこれから気を付ければいいんじゃない?』

『のど飴あめ、あげるよ。早めに対策を取っていたら悪化しない』

『よかったね。それは君が頑張ったからだ』

心地よく響く低い声は、いつだって穏やかで優しくかった。

どうして彼は、こんなにも私のことを分かってくれるんだろう。

最初はただただ不思議で、でもだんだん、それが嬉しくなってきた。店の隅で漫画を読む彼の存在を感じるだけで、見守ってもらっているような気持ちになれた。

ニートさんは、私のことをどう思っているのかなあ。しょっちゅう顔を合わせているけれど、私は彼のことを全然知らない。もっと知ることができたらいいなあ。まずは、名前から。

私はニートさんをそっと窺うかがいながら、いつもそう思うのだった。

そんな彼は、少し遅めの昼食を終え、今日も漫画を開く。

少年漫画が好きみたいだ、というのは表紙をこっそり見て知ったことだ。私が読むのはもっぱら少女漫画だけど、少年漫画も読んでみようかな、なんて最近思っている。同じ本を読んでいたら、話すきっかけができるかもしれない、なんて。

漫画を読み終えたとニートさんは立ち上がり、代金を支払い、「ドーも」と言っ

を出ていく。私はその背中を追いかけた。

「待つて下さい。あの、よかったら傘、使つて下さい」

「いいの？」

軒下で立ち止まった彼の言葉に頷く。

「はい。次にいらした時に、持つてきていただければいいので、どうぞ」

傘を開いて、差し掛ける。えへへ、と笑いかけると、ニートさんは「ありがと」と言つて受け取つてくれた。

「じゃあ、また来る」

「はい！ お待ちしております」

そう言つて私は、降りしきる雨の中を帰つていく広い背中を見送つた。

えへへ、今日はいつてもより多めにお話できちゃつた。雨、これから好きになつちゃうかも。

そんなことを思つていたら、突然店の中から大きな音がした。次いで、伯母の悲鳴が聞こえる。

「何!？」

何があつたの？ 急いで店内に戻る。

ざわめく店内。厨房から、「あなた！ あなた!？」と叫ぶ伯母の声がした。

「伯母さん、どうしたの!？」

厨房に飛び込んだ私の目に、顔を真っ白にして呻いている伯父と、その伯父に縋りつく伯母の姿が映る。伯母が私に気付いて叫んだ。

「救急車を呼んで！ お腹を押さえて、急に倒れたの！ 寿々ちゃん、救急車！」

「俺が呼んだ！ 外に出て、救急車を誘導してくるよ」

お客さんの一人がそう言つて、外に走り出た。

「さっきまでなんともない様子だったのに、どうして？ あなた、しっかりして！」

伯母が声をかけるも、伯父は意識が混濁しているようだった。食いしばった歯の隙間から、弱々しい呻き声がする。

「伯父さん、伯父さん、しっかりして。大丈夫だからね!？」

伯母の横にしゃがみ、伯父の手を握る。血の気の失せた手はひんやりと冷たくなつていた。私は涙声になりながら、伯父を励まし続ける。

急に、何が起こつたの。

いつもの、なんてことのない穏やかな日が、一瞬でその姿を変えた。

十月の終わりの今日は、ポカポカと暖かい小春日和だ。

柔らかない日の光が、赤く染まりかけた葉の隙間から零れ落ちていく。波模様を描く

真つ白な玉砂利たまじりに、はらりと葉が落ちる様は、まるでそこが本物の水面であるかのよう
に感じさせる。綺麗に整えられた紅葉もみじの向こうに、鳥が羽ばたき去っていくのが見えた。
穏やかに時の流れる、高級料亭の離れ。

私は長めの黒髪を結び上げ、慣れぬ振袖を着て、その一室にいた。

母の形見である、桃色に赤の牡丹柄ぼたんがらみの振袖は、二年前の成人式で着た時には嬉しくて
堪らなかつた。見る人がみんな、亡くなった母にそっくりだと褒めちぎってくれたから。
私の母は、誰もが見惚れるぐらいに綺麗な人だつた。そんな母に面差しおもてざしが似ていると
言われて、嬉しくないわけがない。実のところ、私は母ほど鼻筋はなすねが通っていないし、唇
もぼつてりしすぎているので、そっくりとは言えないのだけれど。それでもこの振袖は、
私にとつて大変思い入れのあるものだつた。

そんな振袖なのに、今日は全然気持ちを引き立たせてくれない。帯がやけに苦しくて、
重たくて、泣き出しそうになる。だけど私は泣くことも、ましてや逃げ出すこともでき
ず、ただ人形のようにじつとお行儀よく座つていた。

目の前の黒い漆塗りのお盆の上に、帯のかかつた一万円札の束が積まれていく。それ
が十個積み上がったところで、上座かみざに座つていた古賀さんが「どうだろう」と笑つた。

「少し金額を上げさせてもらったよ。八百万から一千万だ。結婚の支度金としては十分
な額ではないかな？」

「ええ、ええ、それはもう」

私の横に座つて、目を見開いていた伯母が上ずつた声を上げた。

「ま、まさかこんなにご用意してただけるなんて思わなくて、驚いてしまいました。
古賀さんがこれほどまで寿々ちゃんのことを気に入れて下さつていただなんて」

「気に入つて？ いや、これは慈善事業のようなものだよ、梅谷さん」

仕立ての良いブラウンのスーツに身を包んだ古賀さんは、首を横に振つた。そして座
椅子に背を預け、突き出たお腹の前で両手を組むと、肉厚の唇の右端をくつと持ち上げ
て笑う。

「おたくが金銭的に苦労していると聞いたから、俺がこのお金で助けてあげることにし
た。ついでに、若いという以外、何の取り柄とらじもない寿々を嫁よめに貰もらつてやることにした。
それだけのことだよ」

伯母が、ぐつと息を呑んだのが分かつた。古賀さんが細い目をさらに細めて私をちら
りと見る。

「三十近くも年下の女に入れ込んだ、なんて世間に思われたくないんだよ、こっちは。
いくら五十の男やもめと言つたつて、俺には金がある。女なんて選び放題なんだ。何も
この子みたいな、学も取り柄もない女でなくたっていいんだよ」

ぐつと目じりに深い皺しわが刻まれる。私はその小馬鹿にしたような視線を受け止め切れ

ず、俯うつむいて膝の上に乗せた両手の甲をじっと見下ろす。手は少しだけ、震えていた。「まあ若い分素直だろうから、その点は評価しなくちゃならないか。俺がきちんと教育してやるさ」

「え、ええ……。よろしく、お願いいたします。まだ若い娘ですので、色々教えていただくこともあるかと思えます」

伯母が少しだけひきつったような声で言い、私の肩にそっと手を添えた。

「寿々ちゃん、古賀さんのことを信頼してついでいくのよ。古賀さんはきつと、寿々ちゃんのことを父親のように温かく守って下さるはずよ」

伯母の言葉に、ゆっくり頷うなづこうとした。けれど、その前に古賀さんが、ふん、と鼻を鳴らす。

「馬鹿言っちゃいけないよ、梅谷さん。俺は『娘』を貰もらう気はないんだ。俺は、あくまで『女』が欲しいんだよ。俺の世話を何から何までできる、そんな『女』がねえ」

ぐふふ、と笑った古賀さんが、身を乗り出してくる気配がした。と思ったら、突然顎あご先に触れられ、ぐいと上を向かされる。古賀さんが、値踏みするような目でじろじろ見つめてきた。

「ちゃんとこっちを向きなさい、寿々。俺はこれからお前の主人になる男だぞ」

「……………」

白髪の交じった、薄い髪。ふつくらとした脂性あぶらじょうの顔に、細い目。幅広の鼻に厚い唇。私と目が合った途端、古賀さんにはたりと笑って唇をぺろりと舐めた。

「ふん。安いエプロン姿でもそれなりだったが、着飾ればなかなかのものじゃないか。いいか、寿々。これから俺にしっかり仕えるんだぞ」

安いエプロン……

毎日着てきた、デニム生地のエプロンを思い出す。裾すそに梅の刺繍ししゅうが施ほどこされたエプロンは、手芸屋の田中さんがわざわざ私のために作ってくれたものだった。あのエプロンを着て、頭には共布ともふで作ったバンダナをかぶって。そんな出いでで立ちで狭い店内をぐるぐると動き回るのは楽しかった。もう二度と着ることはないけれど……

「寿々、返事は？」

古賀さんの声音が少し、厳しくなる。

「……………」

口を開く。返事をしなきゃと思っているのに、声が出ない。喉のどの奥に大きな塊かたまりがあるようで、苦しい。私は本当に、この人と暮らしていかなくちゃいけないんだ。この人を、好きにならなくちゃいけないんだ。

だって私は、お金でこの人に買われたんだから。

——八月の半ば、お店の営業中に伯父が倒れた。

幸い命に別状はなかったけれど、それでも長期の治療を要する病気が見つかり、入院と手術を余儀なくされた。定食屋の厨房作業はほとんど伯父がしていたから、伯父がいなくては店は立ち行かない。当然休業せざるを得なくなつて、私と伯母は途方に暮れた。

『どうしよう、寿々ちゃん。うちには満足な貯蓄もないのよ……』

伯父の入院は思ひのほか長引きそう、当然治療費もそれだけかかるらしい。おまけに去年お店を改装した際のローンもまだまだ残っている。それらの支払いをすると、伯母と私が二人で働いても生活費すら危うい。伯父の快復が思わしくなければ、店を手放すことになるかもしれない。

そんな時、私に縁談が舞い込んだ。相手は、この辺り一帯の地主である古賀家のご主人。時折店を訪れていた古賀さんが、私に目を留めたとのことだった。

古賀さんは五年前に奥様を亡くされており、それで私を後妻に望んだらしい。伯父夫婦も最初はこの話を断っていた。古賀さんと私では、二十八歳も違う。父娘ども年の離れた男に大事な姪を嫁がせられないと言つてくれた。

しかし、古賀さんが支度金の話を切り出すと、様子が少し変わった。それも当たり前だ。お金は今、梅谷家にとって一番欲しいものだったから。私だつてその話を聞いて、

これで伯父さんたちを助けられる、と思つてしまったのだ。

「寿々、返事はどうした？」

古賀さんの顔が険しくなる。私の顎先を離し、返事を待つように腕を組む。私は、「はい」というたつた二文字を言葉にできず、だんだん深くなつていく彼の皺を見つめることしかできない。

「梅谷の旦那は快く承諾してくれたぞ。横にいる奥さんだつてそうだ。お前は育ての親の顔に泥を塗るつもりか？」

思わず伯母を見た。

数日前、私を伯父の病室に呼び出した時と同じ、何かに耐えるような表情をしている。伯父も今頃、病床で同じ顔をしているに違いない。そう思うと、胸の奥がぎりぎり痛んだ。

——静まり返つた病室の中、ベッドに体を起こした伯父と、その横にそつと寄り添つていた伯母。

二人は長い時間、私の顔を見つめていたが、やがて伯父が絞り出すようにして『古賀さんのお話を前向きに考えてはどうか』と言つた。

『古賀さんはこの辺りの名士だ。お前のこともきつと悪いようにはしない。それに古賀さんのところに行けば、お金で苦勞することはない。もう、朝から晩まで注文取りや皿洗

いをしてなくって済むんだよ』

よく鈍いと言われる私だけれど、この時は、二人の気持ちが分かった。彼らが苦悩の末に、私にこの話を受けるよう勧めているのだと。

『……分かった。私、古賀さんのお話受けるよ』

カサカサになった伯父の手に自分の手を重ね、伯母の目を見て、はっきり言った。

古賀さんが用意すると言った金額は、八百万。加えて、伯母に好条件の仕事を世話してくれるという。この話を受ければ、私たちの不安はかなり和らぐだろう。

私の返事に二人はほっとした顔をしたけれど、すぐにぐっと眉尻を下げた。伯父は視線を逸らし、伯母は唇を噛む。

『ありがとう……、寿々』

『どうしてお礼なんて言うの。私は自分が結婚したいって思ったから、そう言っただけだもん』

顔を歪めた伯父に、笑ってみせた。

私が結婚することで伯父たちが助かるなら……今までの恩が返せるなら、願ってもないことだ。伯父が元気になって、また『うめたに』の営業を再開することができれば、それで満足だから……

だからこうして見合いに臨んだ今、私にできることは、笑顔を作って古賀さんに「こ

れからよろしくお願いします」と言うことだけだ。

両手をぎゅっと握って、お腹に力を入れた。無理やり口角を上げて、懸命に笑おうとする。

けれど次の瞬間、古賀さんの吐き出した言葉が心を凍らせた。

「まさかとは思いますが、好きな男がいるなんてふざけたことを言うんじゃないだろうな、寿々」

「……っ」

好きな男。

心の奥底に沈めた一人の男性の存在が、頭の中に蘇る。彼の、印象的な襟色の瞳を思い出す。

せつかく、忘れようとしていたのに。

喉の奥がひりついて、視界が潤んで、私はようやく絞り出せそうだった言葉を見失った。

伯父が倒れた日から、店は休業している。彼と会ったのは、あの日が最後だった。夏の雨が降る中、帰る姿を見送ったあれが、最後。

彼は、どうしているだろう。私が結婚すると知ったら、どう思うだろう。いや、小さな定食屋の店員のことなんて、もう忘れていくかもしれない……

「寿々々？ どうした、好きな男がいると言うのか！」

「……っ」

古賀さんが声を荒らげ、ダン、とテーブルに拳こぶしを落とす。その音と迫力にびっくりとして、私は首を横に振った。

そうだ、私はもう二度とニートさんに会えない。あの瞳に見つめられることも、声をかけてもらうことも、もうないんだ。だから、忘れなくちゃダメ。それに、私は彼のことなんて、好きになっただけはいないもの。少し、気になってただけ。それだけだもの。

「寿々々！」

テーブルがもう一度強く鳴る。声の出ない私は、壊れたおもちゃのように、ただ首を横に振ることしかできなかった。

好きな人なんていません。そんな人、いません。

古賀さんは私を見て、大きなため息をついた。札束を一つ取り上げ、私の目の前で振る。

「これが欲しいんだろう？ そのために俺と結婚すると決めたんだろう？ お前は俺に買われたんだ。さあ、理解したなら、『よろしくお願ひします』と言ってみろ！」

視界の端で、伯母が両手で顔を覆ったのが見えた。肩が小刻みに揺れている。

ダメだ、泣かせちゃダメ。そんな風に悲しませないために、私はこの縁談を受けたん

だから。「はい」と言わなきゃ、せめて頷うなずかなくちゃ。

そう思うのに、体は金縛りにでもあったように動かない。

酸欠の金魚みたいに口をパクパクさせる私を見て、古賀さんが「寿々々！」と声を張り上げた。

「す、寿々々ちゃ……。ごめんね……。ごめ……」

伯母が繰り返す。両手の隙間から漏れるその声は、古賀さんの耳にも届いたらしい。「チツ」と大きな舌打ちをする。

「何だこれは。俺がすっかり悪者じゃないか。助けて下さってありがとうございます、と言うべきところだろうに」

「す、すみま……。せん……」

伯母が深く頭こうべを垂たれる。

「ねえ、梅谷さん。ちゃんと言い聞かせてから連れてきて下さいよ。こっちは善意でやってんのに、こう嫌な気分になせられちゃ堪たったもんじゃない」

言いながら、古賀さんは私の鼻に紙の束を押し付けた。そして、ねっとりした猫なで声で「寿々々？」と呼ぶ。

「この価値が分かるだろ？ それならきちんと挨拶あいさつしてごらん」

そう言われても、私の口からは一向に音が出てこない。

三人だけの空間は、室内が歪み^{ゆが}そうなほどに空気が張りつめる。きっとこのままでは破裂してしまう。そう思った時だった。

「お客様！ 困ります！」

廊下の方でバタバタという足音と、仲居さんらしき女性の声が出た。

「困ります！ そちらは他のお客様がおられて……っ」

さっ、と障子が開く。そこに立っていたのは、茶色の髪をバックに流した、とてもかっこいい男の人だった。

すつきりした小さな顔に、切れ長の瞳や高い鼻梁^{びりょう}、きゅつと結ばれた唇がバランスよく収まっている。すらりとした体にはグレーのスーツを纏^{まと}っており、それがよく似合っていた。

厳しい顔をしたその人は私を見下ろし、鋭かった眼差し^{まなざし}をふつと和ら^{やわ}げた。色素の薄い瞳を見て、私の心がフリーズする。

……え？

「誰だ？ 部屋でも間違えたかね」

私から男性に視線を移した古賀さんが、苛^{いらだ}立ったように言った。

「早く出ていきなさい、失礼だろう。ああ、君。彼をどうにかしなさい」

慌てて男性の後を追ってきた仲居さんに、古賀さんが命じる。だけど男性は、古賀さ

んに顔を向けて言った。

「あんたに、用があるんだ」

その声を聞いて、私は彼が誰なのか確信した。服装も髪型も普段と全く違うけれど、間違いない。だけど、どうして？ どうして彼がここにいるの？

男性は、持っていた紙袋に無造作に手突っ込んだ。そこから掴^{つか}み出したのは、帯封^{おびふう}のされた札束。それを三つ、古賀さんと私の間にあるテーブルに放り投げる。間違いない、本物のお金の束だ。

「な、なんだ、お前は！」

古賀さんが彼を見上げて言う。彼はそれを無視して、紙袋から札束を掴み出してはテーブルに投げる。三束から六束、そして九束。

「何を、な……」

古賀さんがさっきの私のように口をパクパクとさせる。男性はなおも札束を掴んで、放り投げる。十二、十五、十八、そして。

「これで最後だ」

最後の二つが札束の山の上に、落ちた。

一束が百万円だから、合計二千万円。古賀さんの置いたものを含めれば、このテーブルの上には三千万もの大金が存在していることになる。

古賀さんも、伯母も、止めに入ろうとした仲居さんまでも、その異様な光景に息を呑んでいる。

「梅谷さん」

空になった紙袋を脇に投げやった男性は、伯母に呼びかけた。伯母が慌てて居住まいを正す。

「は、はい!? 何でしょう!」

「ご覧の通り、ここに二千万円あります。このお金で、寿々を買いいます」

「は?」

予想だにしない言葉に、伯母がぼかんと口を開ける。横にいる私もまた、呆然と彼を眺めた。

「金で寿々が手に入るのなら、この人の倍を用意した俺が貰ってもいいでしょう?」

彼がすいと近づいて私に手を差し出した。

「おいで、寿々」

真っ直ぐに私を見て、言う。

その強い眼差しと、迷いのない言葉に押されるようにして、私は彼の手に自分の手を重ねた。

手が触れた瞬間、ぐいと引かれ、私は勢いのままに立ち上がる。棕色の瞳が私を捉

えて、一瞬微笑んだ。しかし、すぐにまた鋭くなる。

「じゃあ頂いていきます。寿々、行くよ」

「ま、待たんか!」

引っ張られるようにして部屋を出た私の手首を、古賀さんが掴んだ。

「急に現れて何を言っているんだ、お前は?。寿々は俺の嫁になるともう決まっとるんだ。突然やってきたお前なんぞに渡せるわけがないだろう。寿々、来い!」

今度は古賀さんに力任せに引っ張られ、体が傾ぐ。危うく転びそうになったけれど、男性が私を抱き寄せてそれを阻んだ。ふわりと彼の香りがする。

「じゃあ、俺よりも金積んでみろよ、おっさん」

頭上で、彼が鼻で笑う気配がした。

「いくらでもいい。俺はその倍を用意してやる。どうだ?」

背後で、古賀さんのぐつと呻く声がする。

「か、金を出せばいいってもんじゃない。人買いじゃあるまいし」

「へえ。金さえあれば若い女だつて買える、つて所構わず吹聴していた人の台詞とは思えないね」

「な……なんだとっ!?」

バンと古賀さんが机を叩く音がした。その音にびっくりすると、背中に回った手に一

際強く抱き寄せられた。

「俺は、金でどうとでもできるっていうあんたのやり方に倣^{なら}ってやってんだ。ほら、あんたはいくら出す？ 二千万？ 三千万？ これ以上出せないんなら、黙^もってな。寿々は、俺が貰^{もら}う」

古賀さんが、喉^{のど}の奥で唸^{うな}った。

「馬鹿な、ことを言うな。お前、正気か……!?!」

「至^{いた}って正気だね。さあ、行くよ、寿々」

彼が私を連れて廊下を歩いていく。後ろから、「ちょっと待て！」と古賀さんの怒鳴り声^{こゑ}が飛んできたけれど、彼は振り返りはしなかった。

「あの、あの！」

私の手を引き、ずんずんと先を歩く彼に声をかける。

「ど、どうしてここに!?!」

「あのおっさん、寿々を嫁に貰^{もら}うって色んなところで言^いって回^{まわ}ってただろ。ちよっと調べたら今日の見合いの場所も時間もすぐに分かった。商店街の人たちから支度金は八百万^{やっぴゃくまん}って話を聞いたから、念のためその倍以上用意した」

「ああ、なるほど」

確かに、私が多額の支度金と引き換えに古賀さんと結婚するという話は、驚くほどの

速^{すみ}さで周囲に広^{ひろ}まっていた。今日のお見合いのこともどういわけだか商店街のみんなが知^しっていて、出^でがけには「耐^たえるんだよ」なんてしんみり見送^{みおく}ってくれたくらいだ。

「……じゃなくて！ そうじゃなくてですね、あの、どうしてここに来てあんなことをしたのか、っていうことを訊^きいてるんです」

「寿々がおっさんに数百万^{ひゃくまん}で買^かわれるって話を聞いた。金でどうにかできるならって思^{おも}って来た」

彼があっさりと言う。しかし、その内容はそんな口調^{くちよう}で言うようなものじゃないと思^{おも}う。

「ど、どうにかって、あの、あんな大金を！」

「大金じゃないよ、全然。寿々の値段^{ねだん}にしちゃ、安い」

「そ、そんな……」

そんなわけない。だって、二千万だよ？

今回の縁談^{えんだん}について聞いた商店街の人たちは、初め「いくら梅谷さん夫婦^{ふうふ}に恩^{おん}があるからって、自分を粗末^{そまつ}にするんじゃないよ」と口々に言^いった。中にはいくらあればいいのかと訊^きく人もいた。それでもみんな、古賀さんが出^です八百万^{やっぴゃくまん}という金額^{きんがく}を聞いた途端^{とたん}、黙^もってしまった。

彼が用意したのは、その倍以上のお金。大金以外の何物^{なにもの}でもない。

おろおろしていると、彼が言う。

「寿々は、あのおっさんに買われたかったの？ あのおっさんの傍そばにいたかった？」

「ち、違います！」

思わず叫んでしまい、慌てて口を押さえた。彼がぐすりと笑う気配がする。

「じゃあ、いいじゃん」

「そ、それはそうですけど。でもこんなことしてもらう理由がありません！ どうしてですか？」

彼の背中に向かって言う。

「どうしてですか、ニートさん！」

見間違えたりなんかしない。どんなに服装や髪型が変わっていようと、私には分かる。

彼——ニートさんが一瞬足を止めた。そして、振り返ることもなく、言った。

「寿々を渡したくなかったから」

「え？」

どくんと心臓が跳ねた。それって、どういう意味……？

「金なんかで他人に渡すなんて嫌だったんだ」

「そ、それはどういうこと、でしょうか？」

「それは……」

私の手を離し、くるとニートさんが振り返った。見上げていた私と、ばちんと目が合う。

何か言おうと口を開きかけたニートさんだったが、一瞬黙り込み、きよろりと目線を逸よらした。

「……それなりに、気に入ってたから」

「気に入って、ですか？」

「ああ。寿々が他人に、しかもあんな下品げずなおっさんに端金はたがねで買われるなんて我慢ならなかった。だから、高値更新して買ったんだよ」

気に入って、とはどういう意味だろう。そんなことを考える私に、ニートさんは「とにかく」と続けた。

「俺は寿々を買えたし、寿々は嫌な男と結婚せずに済んだ。問題ないね」

「え？ ええと、その！」

再び歩き出したニートさんの背中を目で追った。

今の話で唯一理解できたのは、ニートさんが私を助けてくれたということだ。だって、彼の『買う』と古賀さんの『買う』は、響きが全然違うんだもの。ニートさんはお金で『買う』ことで、私を救い出してくれたんだ。

何事かとこちらを見てくる仲居さんや他のお客さんの視線に気付き、私も彼について

長い廊下を進む。途中、振袖の裾が足に絡んでしまった。

「わ、わ！」

私がよろけて転ぶ前に、がしっと支えるニートさん。

「大丈夫？」

「す、すみません」

顔を上げる。びっくりするくらい近いところにニートさんの顔がある。前に店で転びそうになった時より近いみたい。私は思わずぼかんと口を開けて見惚れてしまった。

肌理の細かい肌に、綺麗な顔。澄んだ双眸が真っ直ぐに私を捉えていて、もう少し近づけばそこに映っている私の顔が見えそうだった。

「私……、ニートさんの顔、こんなにはつきり見たの初めてです」

「……ああ、そう」

プイ、と顔を逸らされた。私を立たせた彼は、「追われると面倒だから、もうちょっとだけ頑張つて歩いて」と促す。

古賀さんに捕まってしまうかもしれない。そう考えると背筋がぞつとして、私は足を動かした。

「外まで行けば、タクシー待たせてるから」

「寿々ちゃん！」

別の声をして前方に視線をやると、息を切らせた男性が立っていた。

それは、『うめたに』のある『ひなぎく商店街』の自治会長さんだった。呉服屋の主人なのに、いつも粋に着こなしている着物はすっかり崩れ、髪も乱れ切っていた。

「か、会長さん？」

どうしてこんなところにいるの？ 驚いていると、会長さんは大きく息をついて言った。

「やっぱり、君の不幸を見て見ぬ振りできないってみんなで話し合ったんだ。商店街でできることがあれば何でもやるからさ、古賀さんとお話はとりあえず、もう少し延期しなさい」

私を安心させるかのように、にっこりと笑う会長さん。その汗ばんだ笑顔に目が熱くなる。

商店街のみんな、そんなに私のことを心配してくれてたんだ……

「大丈夫です。寿々はもうあのおっさんのところに行かなくてよくなったので」

思わず涙ぐんでいると、ニートさんが言った。会長さんが不思議そうに首を傾げる。

「君は……？」

「今、あのおっさんのところから寿々を連れてきたところです。追いかけてきたら困るので、ここで失礼します」

ニートさんが小さく頭を下げ、私の手を引いて会長さんの脇を通り抜けようとする。「す、寿々ちゃん？ どういうこと？」

「すみません！ 私は大丈夫です。あの、伯母をお願いします。古賀さんと二人きりなんです！ 古賀さん、すごく怒ってて！」

ニートさんに手を引かれながら言うと、会長さんは戸惑ったまま「わ、分かった」と頷いた。

私たちは玄関を出て、大きな門扉の前まで向かう。半ば引きずられている状態の私は、草履も満足に履けないまま連れ出された。門の外にはニートさんの言う通り、一台のタクシーが停まっている。

「ほら、乗って」

「わ、わわ、あ痛！」

どん、と押されてよろめきながらタクシーの後部座席に転がり込む。反対側のドアで頭を打った。

振袖の扱いに手間取りつつもどうにか体勢を整える私の横に、ニートさんがするりと座る。そして「出して」と短く言った。

タクシーがゆるゆると動き出す。声が出た気がして振り向けば、やっぱり追いかけてきた古賀さんの姿が見えた。料亭の店先で顔を真っ赤にして怒鳴っている。

「戻らんか！ 寿々！」

古賀さんは、靴も履いていない足で地団太を踏みながら叫んでいた。その後ろから会長さんが姿を見せ、古賀さんを宥め始める。そんな二人の姿がどんどん小さくなっていった。

「下品な人間だな」

なおも聞こえる古賀さんの怒鳴り声に、背もたれに身を預けたニートさんが小さく息をついた。

「でも、もうあんな奴と関わらなくて済むよ」

それからちらりと私に視線を寄越した彼は、ぎょっとしたように目を見開いた。

「なんだ。まだ泣いてんの」

「え？ わ、わあ、ほんとだ。え、何ででしょう！」

指摘されて、私はようやく自分が泣いていることに気付いた。まだってことは、ずっと泣いていたんだらうか。

ぼろぼろと溢れる涙が止まらない。ハンカチハンカチ……って、荷物は全部あそこに置いてきたんだった！ おろおろしていると、顔をばさ、と覆われた。

「ぶあ！」

ハンカチでごしごしと目元を拭かれる。「怖かった？」とニートさんの声がする。そ

れはいつもの、お店で時折聞いた声と同じものだった。今度は素直に、「はい」と答えられた。

少し前まで、怒鳴られたり、大きな音をたてられたりして、すごく怖かった。こんな人とこれから暮らしていかなければならないと思うと、恐怖で押し潰されそうだった。

「本当は逃げ出したいくらい怖かったんです。だから、安心、したんだと思います。だから」

ハンカチの向こうにいる人に向かって、続ける。

「ニートさんが来てくれてびっくりしたけど、嬉しかったです」

「……うん」

私は、顔にハンカチを押し当てていた彼の手を握ってずらす。するとニートさんと目が合った。

「助けてくれて、ありがとうございます……あ」

私が生を上げると、ニートさんがふいと顔を逸らし、ハンカチを私の手の中に押し込んだ。

「後は自分で拭きなよ」

「……あ、はい」

目元を拭いながら、さっき見たニートさんの表情を思い出す。

すごく、優しい笑顔だった。いつも前髪越しにしか見ることもなかった笑顔。それとても素敵で、胸がじんわりと温かくなった。いつもあんな顔で私を見てくれたのかな……

思わず、えへへ、と笑うと、ニートさんがこちらを向き、訝しげな目をした。

「泣いてたくせに、もう笑ってる」

「あ、えと、すみません」

「別に、いいけど。あ、その信号を右。西入山駅方面に走って下さい」

ニートさんが運転手さんに説明する。私はハンカチを握りしめて、おずおずと訊いた。

「そうだ。あの、私、これからどこに行くんですか」

「俺の家」

「え？」

「え？ じゃなくて。俺、さっきも寿々を買ったって言ったよね？ だから連れて帰っ

てるって」

「は……」

私は、ニートさんの端整な横顔を見つめた。

「ええと、連れて帰るといことは、その」

「これから、一緒に住んでもらうってことだけ」

「いっしょ……、一緒ですか!？」

声が裏返った。

「そう。だって、買ったものは持って帰るでしょ」

確かに、それはそうだけど。でも！驚きすぎて、あわあわと意味のない言葉ばかりが口をつく。そんな私にニートさんが視線を向ける。

「死ぬほど嫌？」

「え？」

「俺と暮らすの、死ぬほど嫌だって言うなら、考えるけど」

色素の薄い瞳が私を捉える。返事を待つように口を噤んだニートさんと、束の間、見つめ合う。

「……じゃない、です」

「ん？」

「嫌じゃ、ないです」

口が勝手に動いていた。

嫌、なんてことない。状況に心がついていかなただけで、私は全然、嫌だなんて思っていない。

ニートさんがわずかに目を細めて、口元をほころばせた。

「そう。なら、問題ないね」

「は、い……」

「それより、いい加減その『ニートさん』って呼び方やめてもらえるかな？」

「え？ わ、私そう呼んじやってましたか!？」

いけない！今までずっとそう呼んでたから、うっかり口に出していたかも！

両手で口を押さえた私に、彼は「何度もね」と言った。

「今日だけじゃないよ。店の中でも、寿々はたまに俺のこと、そう呼んだよね」

「ええ!？」

さあ、と血の気が引く。聞こえてたの!？彼に聞こえないよう気を付けていたのに！「ニートではないよ、俺。そう見られても仕方ないのかもしれないけど」

彼はひよいと肩を竦め、呆れた口調で言うと、車窓の向こうに視線を投げた。私はひたすら慌てる。

「あ、あの、すみません!」

すごく失礼なあだ名なのに、聞かれてたなんて！私はぺこぺこ頭を下げる。

「な、名前知らなかったし、だからその。でもすみません。一応最初は日替わりさんって呼んでたんですけど、その」

「日替わりさんっていうのも、どうだろうな」

くす、と小さく笑う声が出て、顔を上げる。すると、彼はちらりと私に視線を向けて言った。

「慧」

「え？」

「慧。日下部慧。それが俺の名前」

「慧、さん」

口の中で何度も繰り返す。くさかべ、けい。けいさん。慧さん。

「そう」

「慧さん。はい、覚えました」

「うん」

頷いて、慧さんは私を見た。

「これからよろしく。寿々」

切れ長の目が、私を真っ直ぐに見つめる。もうこの瞳に見つめられることがないと思ったのは、ほんの少し前なのに。こんなことが、起こるなんて。

胸の奥がきゅつと痛くなって、少しだけ息苦しい。しかし、嫌な痛みじゃない。

私はこっくりと頷いた。

「はい」

古賀さんの前で必死に絞り出そうとして、でも出てこなかった二文字。それが彼の前だとすんなり口をついて出る。

車はそれから街を走り続け、『うめたに』のある商店街を通り過ぎ、市の中心部に位置する駅の方面に向かった。

「慧さんって、どこにお住まいなんですか？」

てっきり商店街周辺に住んでいるものだと思っていたけれど。

「駅前」

「ええ、そうなんですか！」

駅前から商店街までは、車で片道二十分ほどかかる。そんなところから通ってくれていたなんて。驚いていると、慧さんが「物好きだと思ってるんだろ」と言った。その口調は少しだけ不機嫌そう。

「いえ、そんなことは思っていないです！ わざわざ来ていただいてたんだあって、嬉しくなっただけです！」

ふるぶると首を振る。そんな私に、慧さんはつんと顔を背けて言った。

「駅前の辺りには定食屋が少ないんだ。だからあそこの商店街まで足を延ばしてただけ」

「ああ、そうですよね。駅前ってお洒落しゃれなお店ばかりですもん」

納得した。

昔ながらの雰囲気を残した商店街とは違い、駅周辺はすぐく華やかな場所だ。ブランド店が立ち並び、行き来するのはみんなお洒落な人たち。

「駅前にはかり買い物が集まるから、商店街はいずれ廃れちゃう、ってみんな言ってたんですけど、そんなこともないですね。慧さんみたいな人が来てくれるんだもん」

「俺みたいなのが大量にいればね。あ、その目の前のマンションで停めて下さい」

慧さんの言葉に、タクシーがゆるゆると停まる。彼に促されて降りた私は、目の前に現れた広いエントランスにボカンとしてしまった。

「え……、ここが、慧さんのお宅です、か？」

「うん。十六階」

「ほえー」

真っ白な外観の高層マンション。ぴかぴかに磨き上げられたエントランス。厚いガラス扉の奥に広がる大きなロビー。まるで高級ホテルのようだ。

タクシーの支払いを済ませた慧さんが、さっさと中に入っていく。カードキーをエントランス脇の小さなディスプレイにかざすと、扉が開いた。こんな光景、今までテレビの中でしか見たことなかったので、間抜けな声を漏らすことしかできない。

「ほえー」

中に入れば、木をふんだんに使った、温かな印象のロビー。奥にはエレベーターの扉が二つ並び、その手前にはホテルのようなカウンター。そこに上品そうなおじさんがいた。

「お帰りなさいませ、日下部さま」

「ああ、どーも。ほら寿々、行くよ」

きよろきよろしていると、慧さんに手首を掴まれた。ぐいぐいと引かれて、エレベーターに乗せられる。

「あの、あの、慧さんって何をしてる人なんですか？」

静かに上昇していく箱の中で尋ねる。こんな高そうな場所に住んでるなんて、一体どんなお仕事をしているんだろう。慧さんは、「俺の名前に聞き覚えはない？」と言った。

「ないです。あの、もしかして有名な方なんですか？」

「んー、ごく一部では、かな。寿々、漫画とか読む？」

「あ、はい！『君に捧ぐ恋』とか『初恋ソルジャー』とか大好きです！」

「少女漫画か。そっか」

ふむ、と慧さんは呟いて「少年漫画は？」と訊いてきた。

「読んだことないです」

「じゃあ、知らないか」

話している間に、十六階に着いた。私は慧さんの後をほてほてとついていく。玄関らしきドアの横には、下のエントランスにもあつた小さなディスプレイが取り付けられていて、カードキーをかざすとドアが開く気配がした。な、なんてハイテクなんだろう。「ほーえー」

「それはもういいから。入って」

「あ、はい」

慧さんの後に続いて中に入り、草履ぞうりを脱いでから周囲を見渡す。わあ、玄関広い。天井高い。

玄関に置かれているのは大きなシューズロッカーだけで、その上にはやはりたった一つ、置物が置かれていた。それは今、小・中学生に大人気の漫画のマスケットキャラクターだった。

「これってマジスクのホムラですよね？」

真つ赤な炎を纏まとった、ウサギに似たデザインのそれを指して訊きいた。

「寿々、マジスクは知ってるの？」

「はい。だつてすごく有名ですもん。私もアニメなら何話か観ました」

『マジカルスクールデイズ』。通称マジスクとは少年誌に連載されている漫画で、魔法学校に入学した兄妹が色んな魔法を覚えながら、魔法世界に君臨する悪の組織に立ち向

かかっていくというストーリーだ。主人公の二人は色々な精霊と仲良くなり、彼らに力を貸してもらう。そして、二人にいつもくっついてる精霊の一人が、このホムラなのだ。たくさんの精霊の中でも一番人気のキャラで、グッズもたくさんある。

『マジカルスクールデイズ』の世界観は緻密ちみつに作り込まれていてリアリティがあり、大人でも夢中になつてしまう。今や一大ブームと呼ばれるほどの人気作で、アニメ、映画、ゲームにもなつており、果ては実写化までされるという噂。大型アミューズメントパークでマジスクのアトラクションが完成した時には、連日ワイドショーでその話題を取り上げていたくらいだ。

『うめたに』のお客さんにも、ファンがたくさんいました。子どもだましじゃない、深い作品だつて教えてもらったんですよ」

「ふうん」

「慧さんも、好きなんですね」

ホムラの真つ赤な鼻先をチョンと突ついて、慧さんを見る。

いつもあんなに漫画を読んでいた慧さんだ。マジスクのファンであつてもおかしくない。

しかし、慧さんは「ファンじゃないよ」と言った。

「え、そうなんですか？ だつてホムラを飾ってるのに」

「これはアニメ制作記念に出版社から貰ったんだ。仕舞っておくのも悪いし、置いてる」

「せいさくきねん？ しゅっぱんしゃ？」

首を傾げる。読者プレゼントとか、そういうものに当選したとか？

慧さんがホムラを手を取った。

「俺、マジスクの原作者なんだ。本名の日下部慧で、今でも週刊誌で原作書いている」

「ほ、え？」

「原作者。マジスクを書いたのは、俺ってこと」

「え、だってマジスクの作者さんってテレビに出てて……」

モデルのようにかつこよくて（慧さんも十分かっこいいけれど）、タレントのようにトークの上手い男の人だったはずだ。あっけらかんとした人柄が人気で、バラエティ番組でよく見かけるから私も知っている。

「それは作画担当の桃里真佑だ。俺はストーリー担当」

「原作……」

そういえば、マジスクは作画する人と原作書く人が別だってテレビで聞いたっけ。どちらか一人がメディアに露出するのを嫌っていて、名前と年齢しか公表していない、とか何とか。

立ち読みサンプル はここまで

確か名前はひらがなで『くさかべけい』。年は二十六、いや、七だったかな。

くさかべけい……？ くさかべ、けい？ 日下部慧!?

「……ほ、ほわあ！ それって、すごいことなんじゃないですか？」

大きな声を上げてしまった。だってマジスクは『超』がつくくらい有名な作品なんだもん。そんなマジスクの作者さんの一人が、慧さんだったなんて。こんな豪華なお家に住めるのも当然だよな。

しかし慧さんはどうでもいいことのように肩を竦めた。

「まあ、ニートじゃないってことが分かってもらえたらいいよ。ほら、とりあえず奥においで」

「は、はい」

慧さんに促されて奥へと進む。通されたリビングダイニングは、梅谷家の私の部屋が三つくらい入りそうな広さだった。大きな窓の向こうにはウッドパネルを敷いたバルコニーが広がっている。

「わあ」

玄関と同じく、ソファやテーブルなどといった家具を最低限置いた、シンプルな室内だ。でも全体的に綺麗に整っていて、慧さんの匂いがする。

「今日からここで一緒に暮らす……んですね」